

聖誕八百年

大沼法龍

总訓

道心公家之夜食あり  
衣履公家之道心あり

大沼法竜著

忍訓

敬行寺發行

卷之四



法親



一読すれば面白い、再読すればその通り、そのとおり、二読すれば成程なるほど、四読すれば私のことが書いてあったのか、五読すれば自然に実行ができます。新聞記事を乱読するようなつもりでお読みになつたのでは、身心の糧にはなりません。因善果、悪因悪果の道理を知らない人はいないけれども、無明の煩惱に狂わされていゝるから、悪報を招いて苦しまねばなりません。善を善と知りつつも、実行しなければ善果を招くことはできません。

釈尊は「教語顯示すれども信用する者少なし。生死休まず悪道絶えず」と仰せられて、折角この道を実行しなさい。よい果報が得られますと慈願を垂れておらるるけれども、信用するものが少なく、実行するものがいませんから、生死休まず悪道絶えずと言われ、「死を求めても得られず、生を求めても得られず、罪惡の招く所、衆に示

してこれを見せしむ」死のうと思つても死なれない、生きようと思つても生きられない、罪惡の招く処、一般に公開してこれを見せしむ、と注意して反省を促しておらるるけれども、信用するものがない。蒔いた種しか生えて来ないということを知らない。名利に走り酒色に耽る方が楽しみであり、乱酔して大言壮語する方が愉快であるから、獵師が鹿を逐うて道を失うように、線香花火のような肉体の歓楽に現を抜かして衣食住の華美を求めて、後に業火の攻め苦を受けることを知らないのです。

線路を横断するときの心得が「止まれ見よ聞け」あなたも人世の横断歩道で「止まれ見よ聞け」と注意してくださいよ。あなたも人世の暴流に押し流されているのですけれども、祖先のお蔭で宗教を聞かしていただく因縁がありますから、「止まれ見よ聞け」世相を静かに諦観してくださいよ。他人がやるから俺もやるでは、他人と同様の惡果を招いて苦しまなければなりませんよ。多くの人々が名利に狂うている中に、誘惑から遁れることは至難であるけれども、誘惑に加担しないことは協調性がなく頑

固<sup>こ</sup>のようであるけれども、それを排除<sup>はいじょ</sup>して進む<sup>すす</sup>ことが忍耐<sup>にんたい</sup>であり、勇氣<sup>ゆうき</sup>であり、精進<sup>しやうじん</sup>であります。

お経<sup>きやう</sup>には「一心<sup>しん</sup>に意<sup>い</sup>を制<sup>せい</sup>し、端身<sup>たんしん</sup>正行<sup>しやうぎやう</sup>にして独り<sup>ひとり</sup>諸善<sup>しよぜん</sup>を作<sup>な</sup>し、衆惡<sup>しゆあく</sup>を為<sup>な</sup>さざれば身<sup>み</sup>独り<sup>ひとり</sup>度脱<sup>どたつ</sup>して、その福徳<sup>ふくとく</sup>度世<sup>どぜ</sup>上天<sup>てん</sup>泥恒<sup>にたいこん</sup>の道<sup>みち</sup>を獲<sup>え</sup>ん」と書<sup>か</sup>いてありますが、いま私は涙<sup>なみだ</sup>ぐみつつ念仏<sup>ねんぶつ</sup>しながら書<sup>か</sup>いております。私は母<sup>はは</sup>の教<sup>おし</sup>えがなかつたら、今頃<sup>いまごろ</sup>どうなつていただらう。僧侶<sup>そうりよ</sup>にさしていただかなかつたら、今頃<sup>いまごろ</sup>は獄舎<sup>ごくや</sup>につながれて呻吟<sup>しんげん</sup>し、世<sup>よ</sup>を呪<sup>のろ</sup>うていたでしょう。母親<sup>はは</sup>の舌<sup>した</sup>一枚<sup>まい</sup>の尊<sup>とん</sup>さを、限<sup>かぎ</sup>りなく感謝<sup>かんしや</sup>しています。

幼<sup>おきな</sup>い時<sup>とき</sup>から母<sup>はは</sup>が常<sup>つね</sup>に、人間<sup>にんげん</sup>の成<sup>せい</sup>功<sup>こう</sup>の一<sup>いっ</sup>番<sup>ばん</sup>邪<sup>じゃ</sup>魔<sup>ま</sup>物<sup>ぶつ</sup>は色<sup>いろ</sup>と酒<sup>さけ</sup>だから、これを慎<sup>つつし</sup>んで一心<sup>しん</sup>不乱<sup>ふらん</sup>に勉強<sup>べんきやう</sup>しなさいよと教<sup>おし</sup>えて、学<sup>がく</sup>資<sup>し</sup>を得<sup>う</sup>るために渡<sup>わ</sup>布<sup>ふ</sup>してくださつたが、その御恩<sup>ごおん</sup>を感謝<sup>かんしや</sup>し、親<sup>おや</sup>を満足<sup>まんぞく</sup>さすには成<sup>せい</sup>績<sup>せき</sup>を上げることだ、学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>は菰<sup>こも</sup>を冠<sup>かぶ</sup>つていても、牡<sup>むす</sup>丹<sup>たん</sup>が美<sup>うつく</sup>しく咲<sup>さ</sup>けば、人<sup>ひと</sup>が菰<sup>こも</sup>は除<sup>のぞ</sup>いて称<sup>しょう</sup>美<sup>び</sup>してくださるのだ、酒<sup>しゆ</sup>色<sup>しき</sup>に浪<sup>なみ</sup>費<sup>ひ</sup>することは両<sup>りやう</sup>親<sup>しん</sup>の心<sup>しん</sup>身<sup>しん</sup>を切<sup>き</sup>り崩<sup>くず</sup>しているのだと思<sup>おも</sup>つたから、自炊<sup>じすい</sup>して余<sup>よ</sup>分<sup>ぶん</sup>は乞<sup>こ</sup>食<sup>じき</sup>に恵<sup>めぐ</sup>んで、友<sup>ゆう</sup>人<sup>じん</sup>と

の交際にも、バーや遊里には一度も踏み込んだことはありませんでした。布教の材料を獲るためによく總會所に参詣し、涙を流して仏恩の鴻恩を喜びつつ感激の生活をしていました。実地の求道になったときは、卒業論文を放棄して生命懸けになり、開発したときの大慶喜、大懺悔は筆舌の及ぶところではありませんでした。

この境地は、素直な真似をして死後を眺めて有難がっている宗教ではない。仏法はいまの生活に光明を放ってくれるので、現在が光明の広海に浮かんだ極促円融の白道でなければならぬ。我機を包んで法の尊高を仰いで調子を合わしている宗教ではない、仏凡一体の境地に立ったときは、極悪最下の実機が大自然を獲て、一切の群生を仏にせずにはおかないという大決定心を諦得するのであります。これを自信教人信というのです。

八方攻撃の中に立ちながら、この信念を枉げることなく信前信後の分際を明らかに説けば求道者に随喜せられて、この世の利益きわまなし、精神的の大満足と肉体的の

大満足を得て、この世が最高無上の楽園となつているのであります。仏の教には寸分の狂いも間違ひもありません。光に向いて進む者は榮え、闇に向いて走るものは滅ぶのであります。

極悪最下の私が生きた証拠であります。神通自在、無碍自在、天上天下に類のない精神的の大満足を得ているのであります。たとい世界中の物質の宝を貰つても、水火盜賊、怨家債主の苦しみから、減らねばよいが盗まれねばよいがの苦勞から、これを維持する苦惱は一生滯つきまとい、息が止まれば一切から離れねばならないが、無形の財産は無尽蔵、仏凡一体だから大宇宙を自分の心とし、世界を自分の住家として、いるから四季の景色が箱庭で、世界の人々は私の使用人、各自が働いて月給を自分が貰つて、私ひとり奉仕してくださるとは、さても尊い人世ではありませんか。しかも再び迷わぬ大般涅槃とは、南無阿彌陀仏、なむあみだぶつ。